フガーニーに師事したエジプト生まれのイスラーム改革思想家。イスラームに基盤をおいた独自の近代化を唱えた。

(8) ハッサン・アル＝バンナー（一九〇六―一九四九）。エジプト生まれ。一九二八年イスラム原理主義によるムスリム同胞団を創立。

(9) サイイド・クトゥブ（一九〇六―一九六六）。エジプトのイスラム原理主義者で、ムスリム同胞団の理論指導者の一人。ナーセル大統領により一九六六年処刑。

【対談者略歴】

山内昌之 東京大学大学院総合文化研究科教授。一九四七年札幌に生まれる。一九七一年北海道大学文学部卒業。東京大学学術博士。カイロ大学客員助教授、東京大学教養学部助教授、トルコ歴史協会研究員、ハーバード大学客員研究員などを経て一九九三年より現職。国際関係史とイスラーム地域研究を専攻。主な著書として、『現代のイスラム』朝日新聞社・一九八三年（発展途上国研究奨励賞）、『スルタンガリエフの夢』東京大学出版会・一九八六年（サントリー学芸賞）、『瀕死のリヴァイアサン』TBSブリタニカ・一九九〇年（毎日出版文化賞）、『ラディカル・ヒストリー』中央公論社・一九九一年（吉野作造賞）、『納得しなかった男』岩波書店・二〇〇一年一二月（司馬遼太郎賞）、『岩波イスラーム辞典』共編著・岩波書店・二〇〇二年一一月（毎日出版文化賞）などを受賞。

森孝一 一九四六年広島市生まれ。同志社大学大学院神学研究科修士課程修了、バークレー神学大学院連合（Graduate Theological Union）博士課程修了。Th. D.（神学博士）。現在、同志社大学神学部教授・学部長。一神教学際研究センター長。専攻、アメリカ宗教史。

主な著書に、『宗教からよむ「アメリカ」』（講談社選書メチエ、一九九六年）、『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身―アメリカ「超保守派」の世界観』（講談社文庫、二〇〇三年）、『アメリカと宗教』（編共著、日本国際問題研究所、一九九七年）、『多文化主義のアメリカ―揺らぐナショナル・アイデンティティ』（共著、東京大学出版会、一九九九年）、『ファンダメンタリズムとは何か―世俗主義への挑戦』（共著、新曜社、一九九四年）。「『宗教国家』アメリカは原理主義を克服できるか?」、『現代思想』二〇〇二年一〇月号。クリントン二期目の大統領就任式中継（NHK衛星第一）の解説を担当した。

エッセイ

宗教者と戦争

星野英紀（ほしの えいき）

一

私は真言宗の僧侶である。仏教系大学の教員でもある。このように私がどっぷり浸かる伝統仏教の世界で、時おり耳にする言葉がある。「仏教は平和的宗教である」。私もそのことに何の異論もない。しかしその言葉の前か後に次のような文言がついてくることが少なくない。「これに対して、一神教は排他的で戦闘的である」「一神教のイスラームは中東でもわかるように乱暴である。そこへいくと仏教は……」という論の展開である。特に最近よく聞くように思う。そうしたとき、陰に陽に「スリランカで長く続いてきた多数派仏教系シンハラ族と少数派ヒンドゥー教系タミル族の対立はどう考えたらいいんですか」と私は問うてきた。私も、仏教は世界で一番平和的な宗教であってほしい。しかし、現実はそれほど簡単に言い切れるものではない。

私は一九九四年から戦争と宗教を考える講義を自校の一年生を相手に開いてきた。はじめは「民族対立と宗教対立」という講義タイトルであった。当時は民族紛争が各地で起こっていた頃で、マスコミなどで「〇〇地域の紛争もまた宗教がらみという面がある」などといった粗っぽい解説が出回っていた。ことはそんなに単純ではない、もっと慎重なとらえ方が必要なはず、と考えたからである。そのうち、S・ハンチントンの『文明の衝突』（一九九八年）が翻訳されて、宗教対立は一層大きな話題となっていった。講座タイトルを「宗教と戦争」に変更した。二〇〇一年には「9・11米同時多発テロ」が起きて、時代はますます私の講座の追い風となった。だからといって毎年受講生数八〇～一〇〇人のクラスが、毎セメスターうまく進むかいえば、そうでもなかった。双方向授業やグループ討議方式を行ったが、出来ばえは毎年違っていた。二〇〇四年度からは身辺多忙になってしまったので、いまは休講中である。

考えてみれば、一〇年間ぐらいほぼ同じテーマで授業を行っていることになるが、時事的なことと密接に関連しているので、自ずと内容は毎年変わっていった。ただし、変わらないことは、最初の授業で見せたビデオの内容であった。そのビデオは内容的に分けると二種類になった。一つは、エジプトのイスラーム過激派「イスラム同胞団」のものとイスラエルの歴史的都市ヘブロンの超保守主義ユダヤ人移植者を描いたものであった。いずれも「暴力的な宗教者」を描いたものであって、イギリスのTV制作会社のドキュメントである。いまひとつは、マザー・テレサの活動と彼女へのインタビューを記録したビデオ（アメリカのものと日本のもの）と、長崎で他宗教対話の活動を行っている禅僧の活動を記録した番組ビデオ（一九九五年第四回FNSドキュメンタリー大賞受賞）であった。マザー・テレサと長崎の禅僧のビデオは、平和と慈悲と愛の実践に献身する宗教家を描いたものである。

一方は宗教が極端な暴力と結びつき、他方は超人的な平和活動、慈悲実践と宗教者とが結びつく。学生とともに、なぜ信仰はこのように両極端の価値観、行動と結びつくのかということを考えたかった。イスラーム、キリスト教、仏教いずれも、それを信仰している人によって、著しく暴力的になったりきわめて慈悲深くなったりする。これはどうしてなのだろうか。これを全面的に解明することはなかなか手のかかることである。個人のDNA情報から家庭環境、社会環境、歴史環境まで克明に調べなければならないであろう。しかし宗教学からもその理由を考えてみることはできる。

二

ここでまず、確認しておきたいことは、いずれの宗教の場合も、教祖の言葉、聖典には絶対平和や慈悲あふれる行為をほめ称える言葉が満ちあふれている。以下、三大宗教の言葉をいくつか聖典から拾い上げてみよう。

〈仏教と慈悲〉

＊「あたかも、母が己が独り子を命を賭けて護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対して、無量の（慈しみの）こころを起すべし」（『スッタニパータ』）

＊「慈しみと平静とあわれみと解脱と喜びとを時に応じて修め、世間すべてに背くことなく、